

## 転倒滑落・道迷い・落石

昔々登山は、若者の命懸けの遊びだった。事故といえば岩場での墜落や落石、冬山での滑落や雪崩と相場が決まっていたのに…。

登山の主流が中高年に移ってから、下山に際しての転倒滑落が事故件数のトップを占めるようになってしまった。加齢に従って体力、特にバランス感覚や脚筋力が低下していくのに、ネームバリューある山に憧れる。体力が低下しているのに赤石岳や幌尻岳をめざす。バランス感覚が低下しているのに、劔岳や奥穂高岳をめざす。転倒滑落事故が発生するのは必然だ。

それが数年前から事故内容が変わってきた。一昨年(2010)の遭難発生件数は、1942件。前年より266件増加しているという。内容は道迷い40.5%でトップ。滑落が16.2%、転倒12.2%、疲労15.2%、病気6.2%と続いている。「道迷い」が最多、なぜなのだろう？

山ガールブームで、登山人口は500万人から1200万人に倍増以上、道迷いは20～50歳代に多いという。そのあたりを重ねると、原因は登山者のレベルの低下にあるような気がしてならない。情報収集手段が、印刷物かインターネットかという点も問題がありそうだ。インターネットから溢れ出る膨大な情報が、あたかも自分自身の知識と錯覚して、山に入り込んではいやしないか。原因の一つに、日没が挙げられていた。この二、三年、ぼくらが下山してもうすぐバス停に着くという3時、4時頃に登ってくる登山者を見かけることが多くなったのだが、ぼくには理解できない現象である。

昨夏も事故は多発。初歩的な事故、中高年登山者による不注意な事故が報告されている。60歳以上の高齢者の事故が多く、こちらは道迷いではなく、前述した通り転倒滑落が目立つ。

理由の最たるものは、体力不足だ。日本山岳会々報『山』796号には、「その根底にあるのは体力不足。余裕を持って長い行程を歩き通すには、それなりの体力が必要となる。単に憧れだけで山やコースを選ぶのではなく、自分の体力を客観的に把握したうえで、無理のないプランを組むようにしたい」と、山岳遭難について多くの著者がある、羽根田治氏のアドバイスがある。

昨夏の北アルプスでは、落石事故も多かった。奥穂高岳のザイテングラードでは、60歳代のご夫婦と8歳になるお孫さんの3人が下山中、お孫さんが落石を受け、助けようとした祖父も一緒に滑落、二人とも亡くなられた。

落石の危険がある場所として、ぼくの頭に浮かぶのは、大キレットを越え、北穂高岳の登りにさしかかった辺り。上部に登山者がいると怖い。静加重静移動できない初心者は、足の出し方が無造作で石を落とし易い。石を落としも、下の人に注意喚起することもできない。石を落としたら、「ラクッ」と大声で注意喚起することを覚えておいて欲しい。